リーリエとサフィロ

虎馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リーリエとサフィロ

【Ｎコード】
Ｎ００６８Ｖ

【作者名】
虎馬

【あらすじ】
《現在、更新停止中です。申し訳ありません》
リーリエは男爵家の一人娘。１５になった現在は結婚適齢期ど真ん中。日々やってくる縁談の選別をすべて兄に任せ、のんびり構えていたら、ある日兄の書斎に呼び出された。理由は、とんでもない縁談が舞い込んできたからだった。――――――お相手のとんでもない権力に引け腰のリーリエと、実力はあるけどどこか常識からずれているお相手、サフィロのラブコメ……になればいいなって思ってる！――――――ちょっと思いついた設定で、試しに書いてみる

ことにしてみました。世界観結構おおざっぱなので、細かいことが気になる方には向かないかもしれません。ご了承ください。

プロローグ：なんで？

女子で十五歳といえば、貴族社会では結婚適齢期まっただ中である。

男爵家の一人娘である私、リーリエ＝コグメーロも例外ではない。

爵位が低いながらもそれなりの財政状況の我が家には、日々、様々な縁談が舞い込んできていた。

それを吟味して私の嫁ぎ先を決めるのはつい最近家督を継いだ長兄、ロートスの役目で、私はどのような家に嫁ぐことになってもいいように、日々奥方修行という名の作法指導を受けていた。

早々に隠居する気満々だった父に鍛えられた兄の選んだ結婚相手なら、コグメーロ家の損になるような相手ではないだろうし、貴族の令嬢として生まれたのだから家のための結婚なんて当たり前だ。

友人たちの中には結婚は恋愛をして、愛しい殿方と……なんて言って頬を染めて精力的に社交の場に繰り出している子たちもいるが、私は別に恋愛結婚なんてしなくても構わないと考えていた。

社交の場には程々に参加して、それなりに顔見知りを作って、あとは結婚後に夫に合わせておけばいいのだ。経済状況がそれなりといってもそれは男爵家としては、という話なので身分的にもそんなに差のある相手と一緒になることもないだろうから、その程度でも追々対応できるだろう。

それに、なんだかんだで兄は私を可愛がってくれているから、人間としてもそれなりに悪くない相手を選んでくれることだろう。

思いを通わせるのは結婚してからゆっくりしていけばいいというのが私の考えだった。

そんなことを思いながらのんびりと日々を過ごしていた私はある日、兄の書斎に呼ばれた。

そこで告げられた言葉は、私のささやかな人生設計を根底からひ

っくり返すような、そんな言葉だった。

「は？え、今、なに、と……？」

私はかぱっと口をあけて目の前の兄をまじまじと見た。

一枚の書状を目の前に置き、兄は「作法がなっていない」と言いながら、頭を振ると、「もう一度しか言わないからな」と前置きし、私の頭から貴族の令嬢らしい作法をすっ飛ばした言葉を繰り返した。

「リーリエ、お前にサフィロ＝モーリスとの婚約の話が来ている」

そう言って兄は机に肘を付き、うなだれた。

私はその場にへたり込んだ。

今度は兄は何も言わなかった。むしろ、二回も口にした言葉に本人も衝撃を受けている様子で、その表情は暗い。

「何の冗談だ……」

兄が呟く。

それは、私の台詞だった。

＊

大陸の東に広大な領土を持つオケアーン王国のモーリス家と言えば、「影の王家」とも呼ばれるほどの力を持つ、他国でも有名な一族であった。本家は侯爵位を持ち、そのほかにも伯爵と子爵に同姓の分家、また姓は違っても婚姻関係によってつながっている家がいくつもある。

元は、地方の男爵家の遠縁にあたる、一介の商家でしかなかった

モーリス家がそのような発展を遂げたのは、モーリス伯爵家の三代前にして初代モーリスの女主人、ペタルダ＝モーリスの時代だった。

実際に発展の足掛かりを作ったのはその先代の彼女の父親の時代で、傾きかけていたモーリスの事業を立て直し、隣国に支店を立てるまでに大きくなったそれを、十八という若さで継いだペタルダはその後、さらに事業を発展させ、オケアーン国内だけでなく他国にも権力を持つ一大商会に仕立て上げた。

そして没落しかけた伯爵家との婚姻を結び、その際、その家に嫁ぐのではなく、その家の持っていた爵位と領地をモーリス家の所有とし、そこで「モーリス伯爵家」という貴族の家系が始まることになる。

その後、彼女は弟の結婚の際に飛び地となっていた所領を送り、ここに「モーリス子爵家」が始まる。

ペタルダは夫の兄の子供と自分の生んだ子供、合わせて九人の子供を育てたという。彼女はその子供たちをすべて自分の嫡子として扱ったため、本人たちと近しいもの以外は九人のうちの何人が、また、誰が彼女の実子であるかはわからない。海を通って侵攻してきた西の大国、ボーラン国との戦いの際の英雄、コルヌ＝モーリスはその姓から察せられるだろうが、そんなペタルダの九人の子供の一人であり、褒美として王族の姫と、戦いによって新しく得られた領土を所領として与えられた彼がやがてモーリス家の本家となる「モーリス侯爵家」の初代侯爵である。

しかも、ペタルダ＝モーリスの繁栄はその３つの爵位を持つ家だけには留まらない。彼女は賢王と名高い、かのラウルス王の後見人であり、伯母でもあった。ラウルス王の母、「白き薔薇の妃」と呼ばれたユグランス王の正妃、後宮史上最高の支配者として君臨したというロサ＝オケアーンの生家はモーリス家であり、紛うことなくペタルダと血を分けた双子の妹であったのだ。

三つの爵位を持ち、王族にも深いつながりを持つモーリス家、その頂点に君臨していたペタルダ＝モーリスを人々はいつしか「影の

女王」と呼ぶようになった。
彼女の後を継いだのは三人目の娘、エスメラルダ。彼女の代にもモーリス家の権威は失われず、彼女の長女トゥルマリナ＝モーリスがモーリス侯爵家二代目である当代の当主に嫁ぎ、侯爵家は名実ともにモーリスの本家という扱いになった。

十一年前にペタルダ＝モーリスが亡くなってからも、モーリス家の繁栄は衰える様子を見せない。
むしろ、彼女が亡くなって十一年しか経っていないにも関わらず、すでにペタルダ＝モーリスは伝説的人物として、吟遊詩人たちの歌に、若者が挙って読む小説に、子供たちの絵本に、学校の教本に、その名が載るほどの存在となっているのだった。

＊

「……つまり？」

私がポツリ、とつぶやくと、兄は俯けていた顔を少し上げて、私を見下ろした。

「もう一度言えって？僕に、もう一度、この、冗談みたいな、手紙の、内容を……？」
「ごめんなさい、お兄様。なんでもありませんわ」

私は床に直に座ったまま首を振った。

「その手紙を読ませていただいても？」
「ああ」

兄は机の上の書状を私に渡した。

私はそれを上から下までじっくりと読む。
分厚く、すべすべとした感触の、明らかに最高級とわかる羊皮紙に、大変美しい字体でそれらは書かれていた。

曰く、新しくコグメーロ男爵家当主となられたロートス殿にお祝い申し上げる。
曰く、これからも末永くモーリス家及びライディーズ家との交流を続けてほしい。
曰く、当家の第一子、サフィロ＝モーリスをリーリエ＝コグメーロの婚約者候補に加えてほしい。

「……」
「……」
「……お兄様……」
「……なんだ、リーリエ」
「あの、これは、本当に……？」
「信じられないが、冗談としか思えないが、ぶっちゃけ冗談であってほしいくらいだが、本当だ」

そういって兄が私に見せた封筒には、確かに蝶々をモチーフとしているモーリス家の封蝋があった。

「あの……これからも末永くって……今までに我が家にはモーリス家との交流はありましたか……？」

私はあえて三つ目の話題に触れず、二つ目の気になった点を話題にした。
明らかに現実逃避しかけている私に、兄は一つため息を付き（というかロートスお兄様も現実逃避したいんだと思う）、答えた。
「いや、モーリス家との直接との交流はないが……ライディーズ家

とはあるだろう？」
「ええ、ありますね。ライディーズ男爵家のご当主も最近お代りになられましたよね、確か」

新しく当主にたった兄の友人を思い浮かべる。
兄と一つ違いの彼はつい最近、長く婚約していた方と結婚し、爵位についたはずだ。
ライディーズ家とは男爵家ということもあり、同じく男爵位にあるコグメーロ家の跡継ぎであった兄は王都の学園に通っていたころから彼と仲が良かったという。

「それがどうかなさいましたか？」

しかしそれらがどうして「モーリス家との交流」につながるというのだろうか？

「だから、ライディーズ男爵家が始まりなんだ」
「は……」
「例の、モーリス家の遠縁の男爵家。あまり知られてないけど。たしかペタルダ＝モーリスの実兄が婿養子に入っていたはずだ」
「……」
「……」
「……」
「つまり、トムは、モーリスの分家の当主なんだ……」

トム、トーマス＝ライディーズ、が兄の友人であり、ライディーズ男爵家現当主様のお名前だ。

「……お兄様、それ、ご存知でしたの……？」
「いや……この前の僕の新当主披露の夜会で初めて聞いた」

「……」
「……冗談だとばっかり……」

つまるところ、兄の学友であったトーマス様はいわゆる「影の王族」という立場だったということだ。
兄は再びうなだれてぶつぶつと何やら呟き始めた。
少しの間その様子を見ていたが、止まる様子がないので、恐る恐る声をかける。

「……あの、お兄様……？」
「……はっ！すまない。ところでリーリエ、淑女がそのように床にじかに座るのは感心しないぞ」

姿勢を正した兄に言われ、私も自分が座り込んでいることを思い出し、立ち上がった。

「さて、それではいつまでも目をそらしていても仕方ないし、そろそろ現実を見ようか」
「何よりも現実離れしている事項だと思いますわ、それ」
「それは仕方ない」
「……」
「さて、実はリーリエ、お前の婚約者候補はそろそろ五人ほどに絞れてきていたのだが、どうしようか」
「……」
「サフィロ様もお入れしておくかい？」
「……お兄様……ほかの候補の方々と、サフィロ様は、同列に扱ってもよろしいのでしょうか……」

私の言葉に兄は深く深く溜息を吐いた。

「だって『サフィロ＝モーリスを候補に加えてほしい』がご要望なんだ……ほかにどうしろと……？」
「でも、サフィロ＝モーリス様って……」
「まあ、そこだよなぁ……なんでモーリス家の中でも、サフィロ様なんだ……」

そう、問題はサフィロ＝モーリス様のお名前である。
これがほかのモーリス家のご子息であれば、まだ私が嫁ぐ相手として（限りなくおかしいけど）まだなんとか考えられなくもない。
しかし、サフィロ様だ。
サフィロ様といえば――

「モーリス『侯爵家』の方ではないですか……！」

――トゥルマリナ＝モーリス様の第一子にして、かのペタルダ＝モーリスのひ孫に当たる、モーリス家本家の跡継ぎ第一候補、「影の王族」でたとえれば、王位継承者第一位の王子様なのだ……。

プロローグ：なんで？（後書き）

思いつきで書いているので、更新は亀もしくはカタツムリです。
ご了承ください。
誤字脱字が特技と言えるくらい多いので、もしお気づきの点がございましたら、お知らせください。

第一話：侯爵家からの縁談

コグメーロ男爵家はつい最近、もっと詳しく言えば二十日前、当主が正式に代替わりした。

二十七歳で父から爵位を受け継いだロートスは、同時についだ代々の当主たちと同じ書斎で大きく溜息を吐いた。

机の上には今しがた書き終えたばかりのリストがある。何のリストか。それは、彼のたった一人の妹、リーリエ＝コグメーロの婚約者候補のリストである。

ベルを三度鳴らし、やってきたメイドにリーリエを呼ぶように伝える。

程なくしてリーリエは硬い顔で書斎にやってきた。昨日の呼び出しの用件を思い出したのだろう。まあ、今日の呼び出しの用件も昨日とさして変わりはないのだが。

ロートスは再び出そうになる溜息を抑えて、机を挟んで目の前に立つ妹にリストを渡した。

「お前の婚約者候補のリストだ」

恐る恐るという風に両手でリストを受け取ったリーリエは上から順に目を走らせ、ゆっくりと視線を兄に戻した。

「お兄様。本当にこれでよろしいのでしょうか……」

ロートスにはリーリエの気持ちが痛いほどよくわかっていた。

「僕が聞きたい」

リストには数え切れないほどの縁談の中からロートスが選びに選び抜いた五人、プラス昨晩思いついた一人、プラスαで七人の男性の名前が載っていた。

初めから選ばれていた五人は全てコグメーロと同じく、男爵家の人間で、内一人が現在当主、二人が長男で跡取り、二人がそこそこ資産のある家の次男だった。男爵家の中でもそれなりの歴史と資産

を持つコグメーロの一人娘の嫁ぎ先として、また権力にまつわる面倒事が苦手なリーリエの相手として、なんら申し分のない相手たちだ。

昨晩急きょ思いついたのは苦肉の策的な候補だった。プラスαは言わずもがな、ロートスとリーリエの表情を硬いものにしている人物、サフィロ＝モーリスのことだが、さすがに男爵家の子息たちとそのまま並べるのもどうかと思い、付け足したのだ。位は伯爵。歴史は古く、過去に王妃を出したこともある家の跡取りの一人息子だった。本来はコグメーロの側から縁談を持っていく様な相手だが、リーリエが十四になった時から熱心に縁談を送って来ているのには、もちろん理由があった。貧乏なのだ。資産だけで言えばコグメーロの方が上だった。もちろん、モーリス家とは比べ物にもならない。ついでに言えば、彼に決まることはほぼない。ただ単にほかの候補者とモーリス家の間の爵位の落差を埋めるためだけの名前だ。

男爵、伯爵、侯爵の順なら少しは違和感も減るだろう。無駄な足掻きでしかないが。本当に、無駄だ。

「そもそも『候補者』だなんて……こちらが選んでよいようなお相手ではないと思いますわ……」

「その通りだよ。夢から覚めるかと思って一応リストにはまとめてみたんだが、むしろ現実であることがはっきりしたな」

「……」

「……」

沈黙が落ちる。

リーリエは手に持っていたリストを机の上に戻し、部屋のわきにあるソファに腰を下ろした。

薄い金色をした、腰まである長さの、まっすぐな髪に手をやりながら、疲れた表情の兄を見る。

ロートスはリストを見、リーリエに視線を移し、かと思えば再びリストを見、頭を振った。リーリエと同じ色の肩につくかつかない

かという長さのそれがさらさらと揺れる。
憂いを帯びた藍色の瞳を伏せて、兄妹は溜息を吐いた。
「こんな縁談、コグメーロ家始まって以来初めてだ……」
まだ、正式に爵位を継いで、ひと月もたっていない自分には、荷が重い、とロートスは心の中で弱音を吐く。ああ、なんで父をあと一か月くらい引き留められなかったのだろう……。今頃海の上で夫婦そろってバカンスを決め込んでいる父に、やはり心の中で、助けを求める。もちろん答えはない。それどころかあと一年は帰らないだろう。
隠居した手始めに、父は今までないがしろにしがちだった母を連れて、十日前から豪華客船での世界一周旅行に行ってしまった。
世界的にも超有名なその客船の名は「第三ロジェ・ブロンシュ号」。二十一年前に造られたそれは、造られるたびに当時の造船技術の粋が集められ、また、造る過程で新たな技術がいくつも生まれるという、伝説級の船「ロジェ・ブロンシュ号」の三代目である。別名「白の女神」とも呼ばれる、大変美しい船で、内装もその名に恥じぬ素晴らしいものだという。この船に乗って航海旅行に出かけることは一種のステータスとされており、いわゆる上流階級に属する人間なら、一度は乗ってみたいと思うものなのだった。先代コグメーロ男爵は十年以上前から乗船の権利を得るために奮闘し、このたび、漸く二人分の乗船権を得たことを切っ掛けに、ロートスに爵位を渡し、さっさと優雅な隠居生活の第一歩を踏み出したのだった。ロートスが引き留められなかったのも仕方がないことだった。今回を逃せば、いつ乗船できたかわからないのだから。
初代のロジェ・ブロンシュ号はかの「白き薔薇の妃」、ロサ＝オケアーンが正妃となった記念としてモーリス商会が造ったものであり、それに続く、ボーラン国との戦いの際コルヌ＝モーリスが乗っていた「白の龍」とも呼ばれる第二ロジェ・ブロンシュ号も、豪華

客船として世界に名を馳せる第三ロジェ・ブロンシュ号も、モーリス商会が造船、所有している。

こんなとこにもモーリス家、である。

父もまさか自分が今乗っている船を所有するところから娘に縁談が来ているなど、考えもしないだろうな……とロートスは遠い目をした。

「お兄様、このお話、お断りできないのでしょうか」

リーリエが問うと、ロートスは静かに首を振った。

「できたら、そうしてやりたいが……。モーリス家のお考えがわからない今は、こちらからは何とも言えない。今回のご要望だって婚約者『候補』だからな」

「そうですか……」

兄妹は再び溜息を吐いた。

婚約者候補というのは大変曖昧な立場である。「婚約者」であれば将来よほどのことがない限りはその相手と結婚することになるが、「候補」という言葉が付くと、それは候補者に対しては「婚約するかどうか、前向きに検討させていただきます」ということで、候補以外の人間には「申し訳ありませんが、候補は絞りましたのでこれ以降の縁談の申し込みはご遠慮ください」ということになる。

サフィロ＝モーリスという侯爵家の子息相手に、男爵家であるコグメーロから「そちらとの縁談については、検討するつもりもありません」などとは、到底言うことはできない。

そもそも、先にも述べたが、ロートスが選んだリーリエの他の婚約者候補たちとサフィロ＝モーリスでは「検討」することすら憚られるほどの違いがあるのだ。モーリス家が他の家と比べて劣るところを挙げるとするならば、爵位を持ってからの歴史の浅さくらいだ

が、貴族社会において重要であると言われてはいるそれも、ペタルダ＝モーリスとその一族の人間の功績の前では、いかにモーリス家に実力があり、その地位にふさわしいかの証明にしかならない。

しかもその歴史の浅さも「爵位を得て貴族になってからのモーリス家」についてのことであり、「モーリス」と言う家の歴史は古い。爵位こそは男爵という低い地位にあるが、オケアーン王国の歴史の中でもそれなりに古参で、貴族社会において発言権の強いライディーズ家の、初代当主夫人の生家であり、その後もライディーズ男爵家と何度か血を混じらせながら続いてきたそこそこの商家が、ペタルダ＝モーリスとその父の時代に国外まで広がる商会となった、モーリス家である。オケアーン王国史の中でわかる、モーリス家の歴史はライディーズ家との繋がりを得てからであり、家そのものは、実は始まりがどこにあるかも定かでないほどに古いものだったりする。

詰まる所、コグメーロから見ればモーリス家は王家も同然。モーリス家から何か言われない限り、次の行動をどうすればいいのか、ロートスの判断で何とかできるものではないのだ。

しかし、とロートスは妹を見ながら考える。

リーリエは明らかにモーリス家との縁談に乗り気ではない。むしろ、後ろ向きという方がピッタリと当てはまる姿勢である。

理由はロートスにもわかっていた。コグメーロ家の人間は大抵、権力に関する面倒事が大の苦手なのだ。

先祖代々から「子孫が苦労しないよう、財産を守り、貧相には見えない程度に質素な生活を送り、領民と共に生活を向上させるべく努力すべし」という家訓のもと育てられてきたため、貴族社会においての上昇志向に無縁な者が多いのがコグメーロ家の特徴である。

もしこれで爵位が高ければこれ幸いと「中立な家」として様々な家の間に立ち、問題を押し付けられるようなことになっていただろ

うが、位は「男爵」。財産を減らさないようにはしているが、増やそうともしないため、資産は「男爵家にしてはそれなり」程度。同じ位の男爵家からしてみればぜひ親戚関係となりたい家だが、貴族社会全体から見れば「毒にも薬にもならないちょっと変な家」という認識で、すり寄ってくる人間も、敵対視してくる人間もほとんどいない。権力の関わる問題ごとなど、まず持ち込まれない。苦手と言うより、免疫がないという方が正しいかもしれない。

社交の場でそういう問題を耳にするたびに微笑んで遠ざかっていくコグメーロ家の人々は、シーズン（社交期）の風物詩となっていたりする。

そんなコグメーロ男爵家で育ったロートスとリーリエは、典型的な「コグメーロ型人間」だった。

彼らにとって今回のモーリス家との縁談は「侯爵家（権力者）との繋がりを持つチャンス」ではなく、「権力の絡む面倒事を次から次へと持ち込んできそうな、やっぱり『面倒事』」でしかなかった。

「なるべく、穏便に、和やかに破談に持っていけるよう、善処する」

弱弱しく笑って言うロートスに、リーリエも弱弱しく頷いた。

書斎の暗く硬かった雰囲気が少し和らいだその時、扉がノックされた。ロートスが答えると、執事のエドアルドが扉を開き、封筒の乗った銀のお盆を持って入ってきた。

「ライディーズ家の使者の方が、旦那様に、と」

「トムから？」

「何かあったのか？」とつぶやきながら手紙を受け取り、表書きを読み、そのまま机の上に置いた。そして両手を脇におろす。

エドアルドが退出し、扉が閉まっても手紙を開ける様子のない兄に、リーリエは首をかしげた。

ロートスは一度目をつぶり、大きく呼吸をすると、目を開けて、

言った。

「リーリエ、お前の名前も書いてある」

その言葉にリーリエは一瞬固まる。嫌な予感しかしない。

ロートスも同じように感じていた。

リーリエが立ち上がり、机の前まで歩いてくる。

表に書いてある宛名には「ロートス＝コグメーロ男爵」、「リーリエ＝コグメーロ嬢」と大変美しい字体で、しっかりと書かれている。この字体には見覚えがあった。

兄妹は顔を見合わせ、また封筒に目を向ける。

「お兄様……」

「……ああ」

リーリエの催促（？）に、ロートスの右手がゆっくりと手紙を掴み、ひっくり返した。

「お兄様……」

「……ああ」

鮮やかな朱色の封蝋は蝶々の家紋が押されていた。

差出人はトゥルマリナ＝モーリス。

現モーリス侯爵夫人にして、件の婚約者候補、サフィロ＝モーリスの母からの手紙であった。

第二話：トゥルマリナの招待状（1／3）

モーリス侯爵家は侯爵家となってからの歴史も浅いため、侯爵家領にある本邸も、他の貴族たちの屋敷に比べるとずいぶんと新しい。

そんな屋敷の中の一室、侯爵家のごくごく私的な応接室であり、居間でもある部屋は、現当主夫人トゥルマリナ＝モーリスの趣味で、ところどころに金の細工が施されたアンティークな家具で統一されていた。初めてその部屋に足を踏み入れるものは、その、華やかながらも決して軽い印象は与えない、落ち着いた雰囲気に思わず大きくため息を吐いてしまうのだった。モーリス家ではこの部屋のことを「トゥルマリナ様のお部屋」と呼んでいる。ちなみに、今は亡きトゥルマリナの祖母は、この部屋を見て「１３，２７０，０００クルーク」と値段を当てて見せ、「お前の趣味はいいわね。親しくなったものにも程よく格の違いを見せつけて差し上げるのも大切なことですからね」と言ったという。――閑話休題。

そんな、自分の趣味で作り上げた空間はやはり居心地が良いようで、その日もトゥルマリナはその部屋にいた。目の前のテーブルに積まれた手紙を一つ一つ確かめながら、彼女は機嫌良さ気に仕分けしている。

「母様、ずいぶんと機嫌がよさそうだね」

「あら」

部屋の入口の方から声をかけられて、トゥルマリナはそちらを向いた。

トゥルマリナの娘で、母親と同じ栗色の髪と父親譲りの紫の目の、絶世の美少女ではないがそれなりに整った顔立ちの少女が不思議そうに母親を見ていた。

「ちゃんとノックしなくちゃダメじゃないの」
「したよ。何回もしたけど返事がなかったから。いないのかと思った」
「あらあら、ごめんなさいね。お手紙を見るのが楽しくて。集中しすぎちゃったのね」
トゥルマリナがうふふ、と笑うと、少女はやれやれ、と言うように首を振って見せた。

「それで、アマティ？何かご用なのかしら」
「ライディーズから。母様、またトム兄様経由で招待状ばらまいたね」
アマティと呼ばれた少女――アマティは愛称で、本名はアマティスタという――が小包を渡すと、トゥルマリナはうれしそうにそれを受け取った。
「トム兄様はまだ当主になったばかりなんだから、仕事を増やしちゃかわいそうだろう」
「でも、しょうがないでしょう？直接我が家から使者を出したら、余計なものがいっぱいついてくるんだもの……」
小包を解きながらトゥルマリナが言う。中からは手紙の束が出てきた。
手紙は、トゥルマリナが最近あちらこちらに出したモーリス侯爵家での夜会の招待状への返信である。
本来はモーリス家から直接出すべきそれを、彼女は分家扱いである、ライディーズ家を経由して送っていた。なぜなら、モーリス家の使者が直接手紙を届けに行くと、必ずと言っていいほど頻繁に貢物と共に帰ってくるからだった。それらもうまくさばいてこそ、とは言えども、自分の趣味に全くあてはまらないものを送られることが大嫌いなトゥルマリナは一度ライディーズ家を経由して招待状を送ることによって「返信のお手紙以外は受け取りません」という意思表示をしているのだった。

それならば、そもそも招待状を送らなければいいのだが、社交の場を主催することがトゥルマリナの趣味なので、毎度ライディーズ家の当主に招待状の取り次ぎを頼んでいるのだった。
「トム兄様に何かお礼をしておかなくちゃ……」とアマティスタが呟き、トゥルマリナは「お願いね」と言って手紙を見た。

手紙の差出人を一つ一つ確認して、最後の一通まで見てから、トゥルマリナは小さくため息を吐いた。それに、アマティスタは「おや？」と首をかしげた。
「どうしたの、母様。珍しいんじゃない、招待状の返信を見てため息を吐くなんて」
「ええ、ちょっとね。一番お返事が欲しい方からのお手紙がなかなか来ないから……」
ペーパーナイフで一つ一つ封を開けて仕分けていくトゥルマリナの表情はすでに楽しげなものに変わってはいたが、アマティスタはその言葉にまた首をかしげた。
「本当に珍しいね、母様の招待状にすぐ返事が来ないなんて」
トゥルマリナの夜会は侯爵夫人、それもモーリス侯爵家の主催する夜会ということもあり、招待されたものは皆すぐに折り返しの返信をしてくる。そして、現在トゥルマリナが仕分けている手紙が一つだけどんどん高く積み上げられていく様からもわかるが、よほどのことがない限り、参加する旨の返事が来る。
モーリス家の夜会に参加するのは貴族社会においてステータスであり、もしこれで誰かのお気に入りになれたなら、一目置かれる存在になることは間違いなしである。
それがわかっていたために、アマティスタにはまだ返事が来ていない者がいるということが不思議だったのだ。
「まあ、ちょっと遠いからしょうがないと言えばそうなのかもしれないわね」

手紙の内容を見ながら、トゥルマリナは微笑んだ。
文章を覗き込むようなまねはしないが、アマティスタには大体の内容が予想できた。きっとそこにはありとあらゆる感謝の言葉と、最近のモーリス家の事業への褒め言葉が連なっているのだろう。褒められるのが大好きなトゥルマリナにうれしい内容であるに違いない。
「ふうん……誰に出したの？」
「ん？」
手紙に集中していたらしいトゥルマリナが顔をあげて首をかしげる。
「だから、だれに出したの？見る限りいつもの人からの返信は来てるみたいだけど」
机の上にある手紙の差出人をざっと見て、アマティスタが問う。
それに、トゥルマリナがふふふ、と笑った。
「あのね、きっと驚くと思うわ」
「だから、だれ？」
じらす母親に、アマティスタは平坦な声で再度問うた。
トゥルマリナが弾んだ声で答える。

「コグメーロ男爵家のロートス＝コグメーロ男爵とリーリエ嬢をお呼びしたの」
「え？なんで？」
アマティスタは再び首をかしげる。あの、シーズン以外の社交の場に姿を見せないことで有名なコグメーロ家に、何故？
「あら、言ってなかったかしら。あのね――――」
その言葉に大きく目を見開いたアマティスタは、だっ、と部屋を飛び出し、父の書斎に飛び込んだ。
「どうした、アマティスタ。侯爵家の娘がそんな風に取り乱すもの

じゃないぞ」
　机の前に座っているアマティスタの父であり、トゥルマリナの夫であるモーリス侯爵がアマティスタの行動をたしなめる。
「そうだよ、アマティ。いついかなる時でも淑女らしい行動を心がけなさい」
　父の隣で書類を抱えている兄、サフィロも声をかけた。
　アマティスタは小さく「ごめんなさい」とつぶやき、息を整えた。
　そして、大きな爆弾を投下する。

　書斎の時間が停止した。

　その五分後、当主の書斎から飛出し、階段を、廊下を駆け抜ける三人の姿があった。

「あら、あなたたち、そんな風に家の中を走るものじゃないわよ」
　三人が飛び込んだ部屋で、トゥルマリナは微笑んでいた。
「マリー、どういうことなんだい？」
「母様、本当なんですか」
「なにが？」
　夫と息子に問われ、トゥルマリナは不思議そうに問い返す。
　アマティスタが焦れたように叫ぶ。
「だから！リーリエ＝コグメーロ嬢を兄様の婚約者にしたってのは、本当なの！？ってこと！」
　それに、トゥルマリナは「ああっ」と手を合わせた。
「だからアマティったら走って出ていっちゃったのね？でも、違うわよ」
　三人はキツネにつままれたような顔をした。

侯爵とサフィロがアマティスタを見る。アマティスタは「でも、さっき……」とおどおどと言う。

「フィーをリーリエ嬢の婚約者『候補』にしてあげてくださいってお願いしたの」

トゥルマリナが微笑んだ。
侯爵は口をかぱっとあけて停止した。
アマティスタは「あ、候補か」と言って頷いた。
そして、サフィロは。

知らないうちにリーリエ＝コグメーロ嬢に求婚していることになっていたサフィロ＝モーリスは、一瞬の停止の後、母に近づき、その手を取った。

「母様、なんて素晴らしいことをしてくれたのですか」

トゥルマリナは満足そうに頷いた。

第二話：トゥルマリナの招待状（1／3）（後書き）

クルークはオケアーンの貨幣単位。
「1クルーク」＝「1日本円」くらい。

第三話：トゥルマリナの招待状（2／3）

ライディーズ男爵家は、モーリス家が貴族となる後ろ盾となった家であり、現在はモーリス家の分家として、男爵位にしては地位が高いが、それなりに末端の家としての扱いを受けている。いや、ここは、扱いを受けていた、と言うべきか。

半年ほど前、ライディーズ家の当主が代替わりをし、二十八のトーマスが男爵位をついでから、実際にはその二年半ほど前から、モーリス本家とライディーズ家の交流は、もはや末端などとは言えないほどに、ますます近しいものとなっていた。

トーマス＝ライディーズは本家第一子であるサフィロ＝モーリスより十年上であるが、侯爵領の隣に領地を持つ、という理由から、本家長子の子守り役をしていた。サフィロ＝モーリスが生まれた翌年から彼が社交の場に出、一人前とされるようになるまでの十四年間、長子であり、将来は爵位を継ぐことが決まっている、というそもそも子守り役としてあまり聞くことのない立場にあるにもかかわらず、王都の学園に通うために侯爵家や実家のある南部地方を離れているとき以外の日々のほとんどを、トーマス＝ライディーズはモーリス侯爵家で過ごしたのだ。その間にモーリス侯爵家の面々はトーマスをいたく気に入り、三年前にトーマスがライディーズ男爵家に戻ってからも、彼に季節の手紙やら贈り物やらを送り、些細なことで呼び出し、トゥルマリナ＝モーリスに至ってはまるで自分の実の息子であるかのように容赦なく、ことあるごとに彼に面倒事を押し付けるのである。トーマスにとって迷惑極まりないことだが、その権力ゆえに、また、その権威の保持のために、「他人」に弱みを見せることを良しとしないモーリス家の人間にそのような扱いを受けるというのは、上流貴族たち、また、モーリス家に連なるモーリスの家名を持たない家々にとってこの上ない名誉であり、現在ライ

ディーズ男爵家は、貴族社会での株を限りなく高騰させているのであった。
そのような事情があるため、トーマスは当主になる前からトゥルマリナの開催する社交の場の招待状の取り次ぎはしており、トゥルマリナの気に入りの貴族やら、上流貴族間の交流の様子を把握できるその作業を、迷惑ではあるが、同時に少しありがたいと思っていた。

トゥルマリナからの小包に招待状とともに入っていた招待者のリストに、数週間前に自分と同じく男爵位を継いだ、一つ年下の学園時代からの友人とその妹の名前を確認するまでは。

次々と届くトゥルマリナの招待状への返信を一通ずつ確かめながら、トーマスは返信が届いた招待者のリストの名前に横線を入れて消していく。
招待状を送ったのは六日前で、リストの名前はほぼ全て、消えていた。
「はぁ……」
リストの紙を眺めながら、トーマスは溜息を吐いた。
ほぼ全ての行が消されている中、横線を引いていない行が二行。
それは、トーマスの溜息の原因とも言える二人の人物、ロートス＝コグメーロ男爵とその妹、リーリエ＝コグメーロの名前だった。
実際の原因は二人ではなく、侯爵家、特にトゥルマリナであり、どちらかと言うとコグメーロの二人は被害者、むしろトーマスは二人に謝らなくてはならないような状況であったりするのだが。
「不参加でもいいから、早く返信をくれよ。あ、いや、不参加は困るか。ああ、でも早く返信を……」
ぶつぶつと彼一人しかいない書斎で呟く姿は少々不気味で、部屋の外ではお茶を運んできたメイドが扉から聞こえる微かな低い声に、ノックするのを躊躇っていた。

「あああああ……なんでトゥルマリナ様たちにロートスの話をしてしまったんだろう……ごめんよお、ロートスっ」
呟きはだんだん大きくなり、やがて普段話す時のような声量となり、やや叫ぶような口調となる。
「あの、典型的コグメーロのやつに！よりにもよって、トゥルマリナ様の招待状なんてっ！」
リストを持つ手に力が入り、変なしわが入る。ノックの音がするが、トーマスの耳には入っていない様子で、彼の独り言はなお続く。
「しかも招待客にトゥルマリナ様のお気に入りがほぼ全員入ってるしっ。わざわざ選りすぐったのかってくらい噂好きの人がいるし、てか、絶対トゥルマリナ様の選りすぐりの情報操作要員だろ！」
扉が開き、人影が一人分入ってきたことにも気付かない。
「次のシーズン、絶対にコグメーロが注目されるんだろうな。どうしよう、ロートスに絶交されたりとかしてしまったら……」
「そんなことになったら、あなた、この世を儚んでしまいそうですわね」
「ああ、この世の終わりだよ……って、あれ」
「やっと気付きました？あなたのその、感情が高ぶると周りの見えなくなるところ、最近少しはましになったかと思っていたのですが、全くそんなことありませんでしたのね」
急に入った合いの手に言葉を返し、そこでトーマスは書斎にもう一人人間がいることに気が付いた。
扉から入ってすぐのところに開いてある椅子に腰を掛け、その前にある小さめの机にお茶のポットを置き、ティーカップを片手に、一人の女性が首を傾け、無表情にトーマスを見ていた。濃い茶色の髪を結い上げ、落ち着いた緑色のシンプルなドレスに身を包んだその女性は、半年前、トーマスが爵位を継ぐと同時に結婚した妻で、名前をパロマという。
「いや、その、少しくらいは……まことに面目ないと思っている」

トーマスはパロマに反論しようとし、彼女の黒い瞳の冷たい一瞥に、あえなく撃沈した。
「トーマス様？わたしは、別に怒っているわけではありませんのよ？そんなに怯えないでいただきたいわ」
淡々とした口調で、パロマは言う。
「ただ、仮にも商業で発展してきたモーリス家の家系に連なる家の当主として、自己の感情に振り回されて周りが見えなくなるというのは、いかがなものかと、呆れているだけですわ」
「パロマ……」
妻のあまりと言えばあまりだが、反論することもできない言葉に、トーマスはうなだれる。
「それと、あなたのそのような所が弱みになってしまって、どうしようもない輩に付け込まれたりはしないかと……心配ですの」
「パロマ……っ」
最後にそっと付け加えられた妻の優しさに、トーマスは再び顔を上げた。夫の単純さにパロマは小さく溜息を吐いたが、口元に持っていったカップで隠れ、トーマスは気付かなかった。

「ところで、パロマ、私の分のお茶はないのか？」
妻の溜息には気が付かなかったが、彼女の持つティーカップには気付いたトーマスが首をかしげる。
「ああ、これがあなたのお茶ですわ」
パロマは自分の持つカップを少し持ち上げて見せ、自分の口へと運ぶ。
「君が飲んでいるよな？」
「ええ、いただいております」
「私の分のお茶を？」
「そうですわ」
とても自然にカップを傾ける妻に、何も間違いのない状況のように錯覚しそうになりながら、トーマスは懸命に質問を続ける。

「何故、私のお茶を、君が、飲んでいるんだ？」
「あなたの独り言が不気味で、メイドがお盆を持って、部屋の前で立ち往生していたのを、お茶が渋くなってはいけない、と引き受けた、心優しいわたしへの報酬です」
心優しい妻は果たして昼前の軽食から、何も飲食していない夫の夕刻のお茶を取り上げるだろうか、と思いながら、トーマスは空になったカップを机に置くパロマに言う。
「のどが渇いた」
「でしょうね」
「お茶が飲みたいんだが」
「わたしも悪魔ではございません。そのメイドに、ちゃんと追加のカップとお湯も頼んでおきましたわ」
普通は逆である。トーマスに先にお茶を渡すのが、本来の正しい選択である。
トーマスが何か言おうと口を開きかけたとき、書斎の扉がノックされた。
「どなた？」
何故か、部屋の主ではないパロマが応える。
「リカルドでございます」
執事の声が聞こえる。
「入ってくれ」
今度は、しっかりとトーマスが声を出した。

「失礼します。旦那様にお手紙が届きましたので。アーナが承りました、奥様のご所望のカップとお湯も一緒に、お持ちしました」
「あら、ありがとう」
リカルドに礼を言うと、パロマは彼の持ってきたお湯でお茶を入れ始めた。
「て、手紙……っ？」
トーマスは自分への用件に、表情を硬くした。

「はい」
「差出人は誰だ」
使用人の前で威厳を失うわけにはいかないと、いまさらなことを思い、努めて平静にトーマスは尋ねる。その様子を、ポットに保温の布を被せながら、パロマがじっと見つめていた。その視線に、トーマスは内心でますます表情を硬くしていた。
「モーリス侯爵家の、」
「トゥルマリナ様かっ？」
「いいえ」
催促の手紙かっ、と腰を浮かせかけたトーマスに、執事は表情を変えることなく即座に否定し、妻はすっと目を細めた。二人の対応に、トーマスはそろり、と椅子に座りなおす。

「アマティスタ様からでございます」
リカルドから手紙を受け取り、彼が部屋から出ていくのを見届けて、トーマスはパロマと目が合わないようにしながら手紙に視線を落とす。
「アマティってことは、労いの手紙かな。珍しい」
この場合の珍しい、とは、アマティスタが労いの手紙を送ってくることに対して、ではない。モーリス侯爵家の第二子で、長女のアマティスタはまだ一桁の歳であるにもかかわらず、侯爵家の面々がトーマスに面倒事を押し付けるたびに労いの手紙を送ってくる、気の付く人間なのである。しかも、いつも何かしら贈り物が一緒に届くので、今回のように手紙だけ、というのは初めてで、トーマスは「珍しい」と言ったのだ。
「えーと、何々？『トム兄様、今回も母がごめんなさい』。いや、気にするな。『もう、ほんと、あれ、も、ちゃんと言っておくからね』。トゥルマリナ様が聞いてくれるような方だろうか……なんだか妙に字が躍ってるし、内容も混乱しているな。つづき、つづき、と……あ」

「トーマス様、お手紙をお読みのところ、申し訳ございません」
「じゃあ、返してくれないか？」
「トーマス様」
「申し訳ない」
「何を謝っていらっしゃるんですの？」

トーマスがわざとらしく手紙を声に出して読んでいると、急に手紙が上に引っ張られ、見ると右手にお茶の注がれたカップを持つパロマが、左手で手紙を取り上げていた。往生際の悪いトーマスの態度に、淹れたての、湯気の立ち上る紅茶の水面が揺れる。思わず謝ると、目を細めた妻が首をかしげる。ひょお、と冷たい風が吹き抜けたような幻聴が、トーマスの耳に響いた。

「お茶をどうぞ」
パロマがトーマスの目の前にお茶を置く。
「少し、お話がありますの。終われば部屋を出ていきますから、お手紙はその後お一人の時に読んでいただくことにしてくださる？」
手紙を裏にして机の端に置いたパロマに、トーマスは無言で頷いた。

すっかりお茶の冷めたころ、薪が燃え尽きた後の灰のようになったトーマスは、妻が扉の向こうに消えるのを見送り、机に突っ伏した。

やがて、アマティスタの手紙の存在を思い出し、彼女の兄の婚約者候補について知るのがその数分後。

思わず「ごめんよ、ロートスウウウウっ」と絶叫を上げ、再び妻

が書斎の扉を開くのは、さらにその数十秒後のことであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0068v/

リーリエとサフィロ

2011年11月15日23時12分発行